

# 日本語学校における PBL の可能性

## —ふたつの日本語学校を経験して—

重信 三和子

### 要 旨

2018 年春、私はふたつの日本語学校の非常勤講師を経験した。ひとつは大学進学を目指して予備教育を行っている日本語学校で、もうひとつは企業で活躍できる人材育成を目指す新設の日本語学校だ。このふたつの日本語学校は学生や教師の様子が全く異なっていて驚いた。新設の日本語学校では Project Based Learning によって、自律した学生たちが地域と関わりながら活動を行っていた。学びの関係が地域へ広がり、教師と学生が共にラーニング・コミュニティを形成することは、教師のあり方に示唆を与える。日本語学校は「日本語を教える」学校から「日本語で活動する」学校へ、転換していくべきではないか。

### キーワード

日本語学校 Project Based Learning (PBL) 地域 ラーニング・コミュニティ

## 1. はじめに

日研を修了してもう 4 年が経とうとしている。この間、大学や短大、民間の日本語学校などさまざまな教育機関で留学生に対して日本語を教えてきた。あちこちで日本語を教えていると、機関によって異なる日本語教育観が見えてくる。2018 年春、私はふたつの日本語学校の非常勤講師を経験した。ひとつは東京の街中にある、進学を目指して予備教育を行っている日本語学校で、もうひとつは企業で活躍できる人材育成を目指して東京の郊外に新しく作られた日本語学校だ。どちらも週に 1 日 4 時間の授業を担当したが、このふたつの日本語学校を行き来しながら、学生の様子や教師の仕事が全く異なることに驚いた。ふたつの学校での実践を振り返り、日本語学校で行う教育について考えてみた。

## 2. ふたつの日本語学校

かえで日本語学校(仮名)は、大学や専門学校に進学を希望する留学生のための日本語学校だ。私が担当したのは、JLPT の N2 合格を目指す 20 名ほどのクラスだった。専門学校に進学したい学生にとって、N2 合格は進学への近道である。クラスのカリキュラムは教務によって細かく決められていて、文法の導入や漢字・語彙・聴解・読解の練習問題が毎日の授業にまんべんなく組み入れられていた。この学校では、試験対策用のテキストを何

冊も消化し、ひたすら試験に合格するための日本語力を養っている。JLPT の試験が近づいてくるとほぼ毎週模擬試験を行い、その都度、個人成績表を作って渡し、成績の優秀な学生は学校の掲示板に名前が張り出される。会話の時間が少ないため日本語でのコミュニケーションができない学生が多く、自己紹介すら満足にできない学生もいた。学生に笑顔は少なく、学校に来てても寝ているだけの学生もいる。学校が試験対策に熱を入れているのとは裏腹に、学生には覇気が感じられない。教師は、決められたスケジュールをこなすのに忙しく、授業内に予定以外のことをする時間的余裕はない。授業が終われば、必要なコピーをとり、模擬試験の採点をし、結果を記録し、宿題をチェックする。私も含め学校の教師たちは皆黙々と作業をこなすように仕事をしていた。

一方、みどり日本語学校(仮名)は、日本で働くことを目指す留学生のための日本語学校だ。私は来日して半年の8名のクラスを担当した。この学校は協働で課題に取り組む活動(プロジェクト)を通して、主にIT企業で活躍できる人材を育成することを目標にしている。「地域の観光業を活性化するために何ができるか」「日本語学習者に役立つアプリを作ろう」など、地域や社会と密接に関わる課題について学期ごとに取り組んでいる。プロジェクトの指針は基本的にまず教師側から提示され、プランについて合意を得ると学生は自主的に活動を行う。授業では、それぞれが課題について調べ、考え、その考えを伝え、話し合いをする。学生同士は共通言語である英語や日本語を用いてコミュニケーションを行っている。取り組んだ課題は地域の人々に向けて発信するために、日本語で発表用資料を作ったり、プレゼンテーションの準備をしたりする。文法や漢字などの日本語を構成する要素を学ぶための授業は行われない。学生は授業以外の時間に日本語の文法や漢字などを独習している。学生が自主的に学ぶため、授業ではあまり教師の出番がない。教師は全体的様子を見ながら可能なサポートを行うくらいだ。

ふたつの日本語学校を行き来して一番感じたのは、学生の学ぶことに対するモチベーションの差である。残念ながら、かえで日本語学校の学生たちのモチベーションの低さは目を覆いたくなるほどだった。それに対してみどり日本語学校の学生たちのモチベーションは高く、教師が何も言わなくても活動が進んでいく。ここまで自律した学生を見たのは初めてだった。

### 3. PBL

昨年の冬に、みどり日本語学校で「地域創生のための新たなサービスを考える」というテーマのプレゼンテーションを聞いた。そのとき発表した学生たちは、日本語がほぼゼロの状態で来日して3か月経ったところだった。私がそれまで知っていた「日本語学習歴3か月の学生」は、少しコミュニケーションがとれるようになってきた程度のレベルである。その段階で地域に住む人々や業界の専門家を招いてプレゼンテーションを行うというのは、日本語力的にほとんど無謀なことだと思われた。だが、そのときのプレゼンテーションで学生たちは、オーディエンスが理解できる日本語で話していたし、地域の人々からは的を得たコメントをもらい、業界の人からはその内容を酷評されてもいた。そのときオーディエンスが評価したのは、「日本語力」ではなく「内容」なのだった。日本語教師は「日本語

力」ばかりに目が行き、日本語学習歴が3か月の学生は満足に発表できないと決めつけがちだ。しかしこの発表では、学習歴が短くても自分たちの考えを日本語で対外的に伝えることができていた。なぜ彼らにはそれが可能だったのだろうか。

みどり日本語学校が行なっているプロジェクト活動は、Project Based Learning (PBL) と呼ばれている (PBL は Problem Based Learning とも言われ、どちらも「課題解決型学習」と訳される)。Project Based Learning は、アメリカの教育学者キルパトリックが20世紀初頭に提唱した「プロジェクト・メソッド (project method)」を基本としている。Project Method は、学校教育の中で「児童・生徒が自ら計画を立て、現実生活の中で問題を解決する実践的活動を重視する」学習指導の形態である。

NPO 法人日本 PBL 研究所を設立し、日本における PBL 研究の第一人者である上杉賢士は、Project Based Learning (以下 PBL) は「学習者が問題を発見し、解決の見通しをつけて実行し、何らの形で結論を得る」ための学習法であり、「その中心的な特徴は、学習への動機づけに最大限の配慮を行うとともに、問題解決の一連のプロセスを自律的に遂行する点にある」(上杉 2009a:2) と述べている。PBL では、なぜその活動を行うのかが学習者の中で腑に落ちていることが肝要で、それにより活動は自律的な学びに結びつくことになる。

上杉はアメリカのミネソタ州の高校で行われた PBL の実践例<sup>1</sup>から、プロジェクトを進める際には「地域で働いている人や住民、専門家など、実在の人物から情報を得ること」を重要視する。そうして「学びの関係が地域へ広がり、多様になっていく」ことを PBL では「ラーニング・コミュニティ」と呼んでいる。また、教室の外に出れば「学生」と「教師」の関係も変化する。教室の外では「学生」と「教師」が共に同じものを見ることになり、相対する関係から共立する関係へと変わる。両者は共に学び合う新たな関係となつて関係性が拡大していく。そのとき「学生」と「教師」は教え教えられる関係を脱し、ともに「ラーニング・コミュニティ」を形成することになると言う。(上杉 2008:25)

みどり日本語学校では、まず課題に対する動機を学生が自覚し、自ら課題に向き合おうとする姿勢を育てるところから授業が組み立てられていた。さらに、授業で地域とつながる活動を繰り返し行うことによって、学生たちは地域に融けこんでいった。まさに「ラーニング・コミュニティ」が形成されていたことになる。みどり日本語学校の学生は身近な日本の社会との関係性を構築することで、日本語で発信する力がどんどん磨かれていたのである。

#### 4. 日本語学校における PBL

PBL は日本語教育においても、大学や大学院のビジネス教育の分野などですでに取り入れられている。PBL による学びは「自らの将来に向けたキャリア形成にきわめて有効」(上杉 2009b:2) であり、学校卒業後の社会人の人材育成に適した学習方法だといえることができる。一方、予備教育を行う大方の日本語学校では、試験に合格して進学することが最重要課題と位置付けられているため、活動型の授業の実現は難しいようにみえる。だが、かえり日本語学校の例を見ても、コミュニケーションを無視した言葉の詰め込みトレーニング

グが、コミュニケーションのできない人を作っていることは明らかだ。彼らはたとえ進学を果たしたとしても、日本語で自分を語ることができず、コミュニケーション不全感に苦しめられることだろう。

「ことばの活動とその教育によって育まれなければならないことは、トレーニングによる個別の『能力育成』ではなく、より包括的な、生きるための『考える個人』の形成であり、それはそのまま『人間形成』としてのことばの教育のあり方なのである」（細川 2016:51）と、細川はことばの教育の本質を述べる。アクティブラーニングが盛んに叫ばれる現代においても、かえって日本語学校のような旧態依然とした学校が今もある。多くの教師や学生が、日本語学校とは「日本語を（技術として）教える」学校だと今も考えている。しかし、日本語学校も「人間形成」を目指す「ことばの教育」機関であるならば、人間性を無視した詰め込み教育をあらため、進学した後も自律して生きていける「考える個人」を育てようとするべきではないか。コミュニケーション不全感に苦しむ学生をこれ以上増やさないためにも、日本語学校は「日本語を教える」学校から「日本語で活動する」学校へ転換していくべきだと考える。みどり日本語学校の登場は、日本語学校のあり方に一石を投じている。

## 5. 日本語教師は何をするか

ところで、みどり日本語学校のように学生たちが自主的に課題に取り組むようになると、教師は授業であることがない。実際、私が担当したとき、みどり日本語学校の学生たちは彼らの専門分野の知識を活かした新しいアプリの開発に忙しく、そこに私が入っていく余地はほとんどなかった。これまで日本語教師として学生の前に立ってきた私は、教師の出番がないという状況に何より面食らった。長年教師をしていると、「教師は何かを教える者」という教師観から自由になるのはたやすいことではない。「教えられる」教師は七転八倒して、教室の窓の外に広がる山々に目をやりながら無理して何かを教えようとしたりしたが、そんな自分はいたいそう滑稽に見えた。そして「私がここでできることは何だろう？」とずっと考えていた。自律した学習者の前に立ったとき、「教師」として自分ができることは何か、それは私の大きな課題となった。

先のミネソタ州の高校では、教師は学生が取り組むプロジェクトに協力をする「アドバイザー」と呼ばれる。学生と教師が共に学ぶ「ラーニング・コミュニティ」の考え方は、教師のあり方に一つの示唆を与えてくれる。今、私も自律した学生と共に学ぶ教師でありたいと思う。最近では、教師の出番のない授業はいい授業だと思っている。

## 6. 終わりに

日本語教育は、日本語を学ぶことを通して「人が成長すること」や「よりよい社会を築くこと」を目指すものだと考えるようになったのは、日研で学んだおかげだ。今回、タイプの違うふたつの日本語学校に携わることで、あらためて日本語を学ぶ意義について考えることができた。特にみどり日本語学校で PBL を実体験できたことは、私にとって大き

な財産になった。日本語学校における PBL が、今後どのように展開していくか楽しみにしたい。これからの日本語学校のフィールドに、みどりがいっぱい広がっていくことを願っている。

## 注

- 1 アメリカのミネソタ州にあるミネソタ・ニューカントリースクールが開発したプロジェクト。1990 年代に導入された PBL によって、有能な社会人育成に成果を上げている。

## 参考文献

- 上杉賢士（2008）「コミュニケーション・スキルを高めるプロジェクト・ベース学習—「目的」ではなく「手段」としてのスキル獲得を—」『BERD』11 号 p. 23-27 ベネッセ教育総合研究所
- 上杉賢士（2009a）「〈上〉PBL 情報化社会の新たな学習法-PBL とは何か ミネソタ州ニューカントリースクールに学ぶ」日本私立大学協会 教育学術新聞 平成 21 年 6 月第 2362 号  
<https://www.shidaikyo.or.jp/newspaper/rensai/education/2362-3-2.html>  
 2018 年 10 月 18 日確認
- 上杉賢士（2009b）「PBL 情報化社会の新たな学習法-中- PBL で育つ子どもたち 日常的な学び通して自信を獲得」日本私立大学協会 教育学術新聞 平成 21 年 6 月第 2363 号  
[https://www.shidaikyo.or.jp/newspaper/online/2363/3\\_3.html](https://www.shidaikyo.or.jp/newspaper/online/2363/3_3.html)  
 2018 年 10 月 18 日確認
- 細川英雄（2016）「市民性形成をめざす言語教育とは何か」『リテラシーズ』18 p.44-55 くろしお出版

（しげのぶ みわこ 釜山大学校日語日文学科）